山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第８集

山梨県北巨摩郡高根町

丘の公園14番ホール遺跡
範囲確認調査報告書

1985.3

山梨県教育委員会
山梨県企業局

序

本報告書は、県営ゴルフ場建設に先立ち、1984年5月～6月に実施した山梨県北巨摩郡高根町念場原県有林内の「丘の公園14番ホール遺跡範囲確認調査」の結果をまとめたものであります。

当遺跡の位置する八ケ岳山麓は、先土器時代末期の槍先形尖頭器文化の遺跡が多く、1つの文化圏を形成していますが、従前遺跡はすべて長野県側に限られ、山梨県側については、存在が予想されながら、確認されるには至りませんでした。

今回の調査の結果、当遺跡から槍先形尖頭器等石器50余点のほか、石核・剥片・砕片・木炭片等数千点が出土し、槍先形尖頭器文化の八ケ岳文化圏が、確実に山梨県側に広がっていることが始めて実証されました。また山梨県内で従前から知られている先土器時代の遺跡は十数か所ありますが、槍先形尖頭文化の遺跡として、当遺跡が質・量ともに最も充実しております。この意味で、八ケ岳文化圏の全貌の解明の上に、また山梨県における当該期の究明の上に、当遺跡は必要欠くべからざる存在であり、本報告書の利用価値は大きいと信じております。

なお当遺跡は、企業局との協議の結果、そのまま保存されることとなりました。企業局の方々のご英断に改めて深甚の敬意と謝意とを表します。また直接発掘調査に参加された方々にも厚く御礼申し上げます。

1985年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　磯　貝　正　義

例　　言

1. 本書は、昭和59年に山梨県企業局から委託され、山梨県教育委員会が実施した、山梨県北巨摩郡高根町念場原県有林内に所在する丘の公園14番ホール遺跡の範囲確認調査報告書である。
2. 調査は山梨県埋蔵文化財センターが担当し、昭和59年5月9日から同年6月19日まで行った。
3. 遺跡は県教育委員会と県企業局の協議により現地保存された。
4. 本書は調査担当者保坂康夫が執筆・編集した。遺物実測・トレースは保坂が行い、遺物写真撮影は塚原明生（日本写真家協会会員）が行った。
5. 遺物・図面は山梨県埋蔵文化財センターが保管している。
6. 調査参加者は下記のとおりである。（敬称略）

浅川美代	浅川洋子	浅川米子	重川恵美子
重川八千子	河西真知子	輿水義一	篠原邦彦
高野俊彦	谷口　信	千野光子	中島ねのえ
藤原芳郎	八巻　栄	八巻知子	

7. 調査から報告書作成に至る過程で、次の方々から特に多大なご助力をいただいた。衷心より謝意を表する。（敬称略）

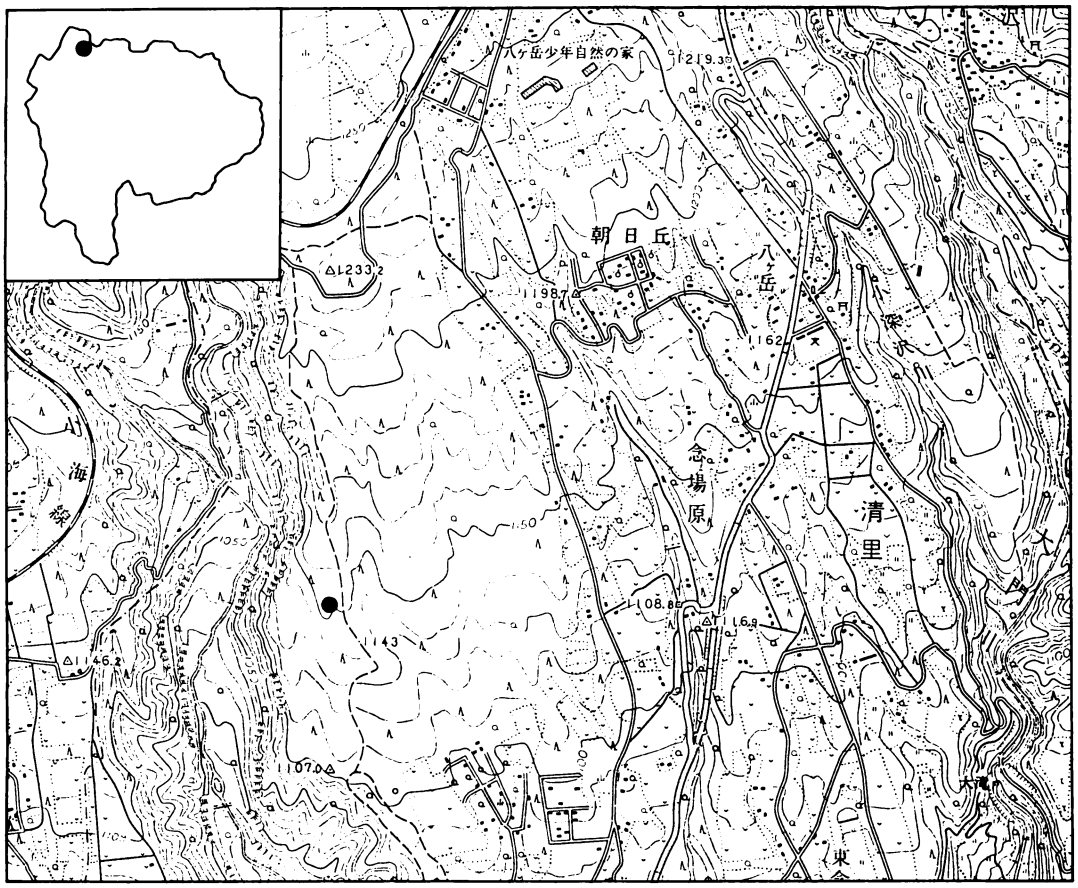
猪股喜文	小沢明子	小尾正彦	熊井久雄
谷口彰男	名取洋子	西宮克彦	橋本真紀夫
服部智則	早川建夫	松田丞司	宮沢　隆

目　　次

Ⅰ　調査および遺跡保存に至る経緯 …… 1
Ⅱ　調査の方法と経過 …… 2
Ⅲ　位置と環境 …… 3
Ⅳ　層序 …… 4
Ⅴ　遺物の出土状況 …… 5
Ⅵ　遺跡の範囲 …… 14
Ⅶ　出土遺物 …… 15
Ⅷ　まとめ …… 21

Ⅰ　調査および遺跡保存に至る経緯

山梨県北巨摩郡高根町念場原の県有林内131haを昭和59年度から64年度にかけて開発し、ゴルフ場などの総合スポーツレクリェーション施設の建設計画が県企業局によって立案された。この地域は山林のため遺跡の存否が不明で、昭和51年度の県内遺跡分布調査でも確認されなかった。しかし、最近周辺の開墾地で石器や土器が表採され、また先土器時代遺跡群のある野辺山高原に近接し、地形的にも遺跡の存在が予想されることから、山梨県教育委員会は国庫補助事業としてこの地域の遺跡分布調査を行った。この八ケ岳東南麓遺跡分布調査は、約25mの間隔で1m四方の試掘坑を設定し、遺構・遺物の存在を確認するものである。調査は県林務部による清里の森建設予定地も含め昭和58・59年度に行い、昭和60年度にも予定しているが、本遺跡は昭和58年10月6日から同年11月15日にかけて行った調査で確認された。そこで、県教育委員会と県企業局とで協議し、まず遺跡範囲確認調査を行い、その結果をふまえて後の対策を決定することとなった。調査は県企業局から県教育委員会に委託され、昭和59年5月9日から同年6月19日まで山梨県埋蔵文化財センターにより実施された。遺跡は丘の公園内ゴルフ場の14番ホールのコース予定地に接するため、丘の公園14番ホ



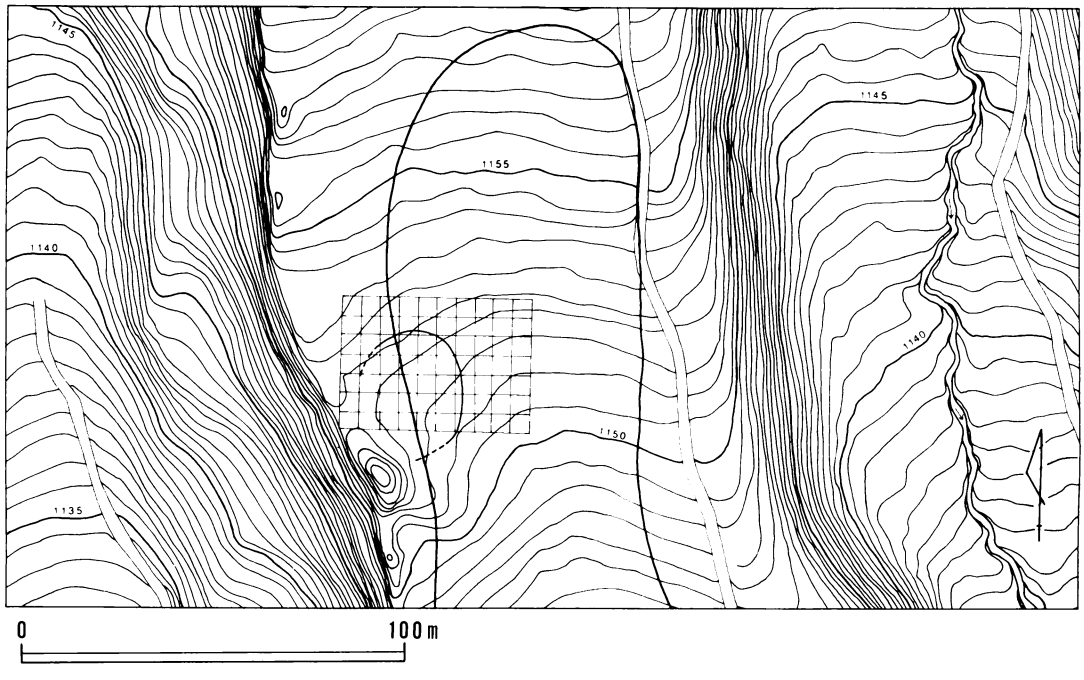
第1図　遺　跡　位　置　図（25000分の1）

ール遺跡と命名された。調査の結果、遺跡は直径約30mの広がりを持ち、コース西側に15mほど入ることが確認された。県教育委員会と県企業局はこの結果をふまえて協議し、コースは予定どおり建設するが遺跡がコースに入る範囲は立木を残して保存し工事を行わない旨決定され、そのように実行された。

II 調査の方法と経過

県企業局が設定した100m方眼の座標軸の交点にある杭を基準にグリッドを設定した。座標軸の南北線は磁北方向に設定されている。グリッドは5m方眼とし、東西方向に西からA・B・Cのアルファベットを付し、南北方向に北から0・1・2のアラビア数字を付してグリッドの名称を決定した。昭和58年度の分布調査の際の試掘坑はA2・A3・B2・B3・C5・D3区に1カ所ずつあるが、このうちB3・C5・D3より剥片が出土している。そこで、これより東側、14番ホールのコースにどれだけ遺跡が入り込むかを主眼に調査を行うこととし、グリッドも東側に広がりをもたせた。なお、県企業局設定の杭はHとIの境界線と3と4の境界線の交点にあり、番号はX2Y15である。分布調査の際、剥片はⅣ層付近より発見されたことから、I・Ⅱ層はスコップで除去しⅢ層以下をジョレンで掘り下げることとした。Ⅱ層以下の排土は極力フルイがけを行い遺物を採取した。調査の経過は、次のごとくである。

5月8日に器材搬入。5月9日に杭打ち作業、グリッド設定、C3・D2・D4・E3区の掘り下げ開始。E3区の遺物出土量が多く、Ⅱ層上面よりジョレンで掘り下げる。5月18日にE3区排土の水洗選別作業開始。5月19日に小試掘坑の掘り下げ開始。5月23日にE3区を中心としたブロックの範囲確認のためE2・E4区の掘り下げ開始。5月25日にF3区掘り下げ開始。6月1日に

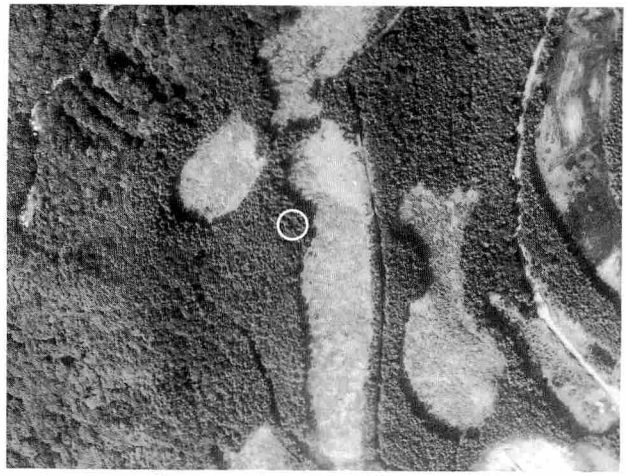


第2図　遺跡周辺地形図（2000分の1）

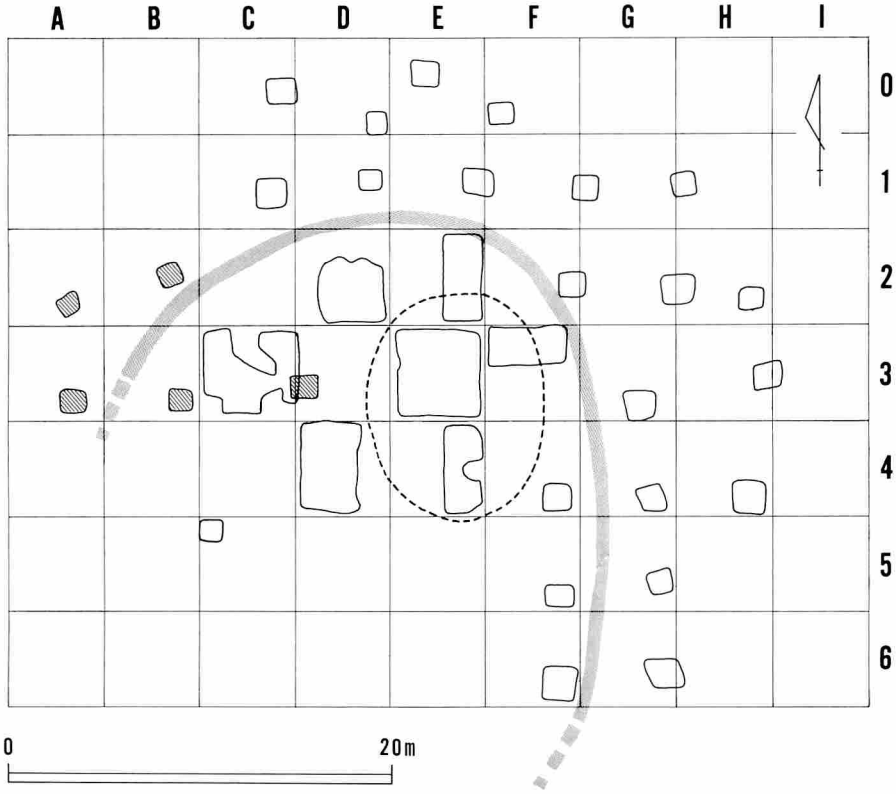
一部埋めもどし作業開始。6月6日に水洗作業中断、作業人員縮小。6月19日に調査終了。なお、遺物はグリッド単位で北からと西からの距離およびレベルを測定し取り上げた。

III 位置と環境

八ケ岳南東麓、長野県境に接して念場原がある。平安時代の甲斐の三御牧の1つ柏前牧の比定地（磯貝・飯田 1973）であり、『甲斐国志』にみえるように中世、念場千軒と称されて栄えたと言われる。開墾地から縄文早期～中期・古墳前期・平安時代などの遺物が表採されている（谷口彰男氏のご教示による）。念場原は西を川俣川、東を大門川によって深く侵蝕され、高さ100 mを越える断崖が形成されていて、独立した台地となっている。この台地は、八ケ岳火山の噴出物をおおう岩屑によって構成される。下末吉層堆積期の八ケ岳大噴火により甲府盆地をもおおう韮崎火



第3図　遺跡周辺航空写真



第4図　調査坑の配置と遺跡の範囲

砕流が厚く堆積するが、本地域でも存在する。その上を八ケ岳南麓全体にみられる弘法坂礫層がおおう。この上にＰｍ－Ｉを含む中部ローム層とＰｍ－Ⅳ以上の上部ローム層が乗る（八ケ岳南麓団研グループ　1969 ）。台地上には南方へ流れる小河川が多数存在し、その侵蝕による低地と帯状の高平坦地とが形成されていて、特に台地西部ではこの状況が明瞭である。本遺跡は、台地西端で川俣川崖線に接する高平坦地の西側肩部にある。遺跡の立地する平坦地は東西両側を低地に狭まれているが、この低地は川俣川崖線によって切られている。川俣川の断崖形成後、水路が絶たれたものと思われ、東側低地に湧水による小河川があるものの大きな水路はない。低地は平坦であるが、湿地状ではなく乾燥している。高平坦地と違い礫を多量に含むローム層があり、その上を黒色土以上の層がおおう。この低地が川俣川から分離したのは、ソフトローム層がみられない以上、この堆積以後と考えられる。川俣川が急に谷を深く掘り始めたのは、本遺跡の形成以後であっただろう。貝塚爽平氏は山間河川の多くが約１万年前から急に谷を深くすることを指摘している（貝塚　1977）が、その動きと呼応するものであろう。なお、本地域は現在カラマツ林となっている。

Ⅳ　層　　序

最上部のＩ層は暗褐色砂質土である。非常に軟質でフカフカしている。母材となっている細かな砂粒が肉眼でも観察でき、塊状を呈さず粒子状の構造をもつ。Ⅱ層との境界は非常に明瞭で、しかも直線的であり、急激に本層がⅡ層をおおってしまったものと思われる。本層は遺跡の立地する高平坦地の西端にゆくにしたがって急激に厚くなり、東方では高平坦地中央付近でほとんどなくなる。高平坦地西縁部には純粋に本層のみによって構成される土塁状の小山が連なる。高いものは３ｍほどもある。分布調査の所見では、本層は川俣川崖線にそって幅300ｍほどの帯状に分布し、台地内部にはみられない。こうした所見から、本層は黒色土層堆積後急激に形成された、川俣川から吹き上げられた細粒鉱物による風成堆積土であると思われる。

Ⅱ層は黒色土上部の漆黒色土層である。Ⅲ層よりかなり軟質であり、均質である。遺物は本層上面から分布し、下層に行くにしたがい量を増す。

Ⅲ層は黒色土下部の黒褐色土層である。Ⅱ層より明るく硬質である。Ⅱ層との境界は波状をなす。昭和59年度の八ケ岳東南麓遺跡分布調査の際、本層上部で縄文早期末の土器片が多数発見された。本土層の形成は縄文早期末以前と思われる。なお、Ⅱ・Ⅲ層は低地面もおおっている。

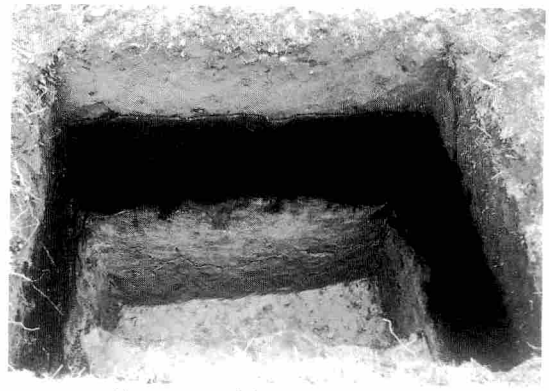
Ⅳ層は暗褐色粘質土層である。部分的に存在したり、極度に波状をなし、均質ではなく、Ⅲ層とＶ層の漸移層と思われる。遺物の出土量は本層からＶ層上部にかけて最も多い。

Ｖ層はソフトローム層である。明褐色、軟質で粘性に富む。30cmほどの厚さであるが上部20cmほどまで遺物の分布がみられる。

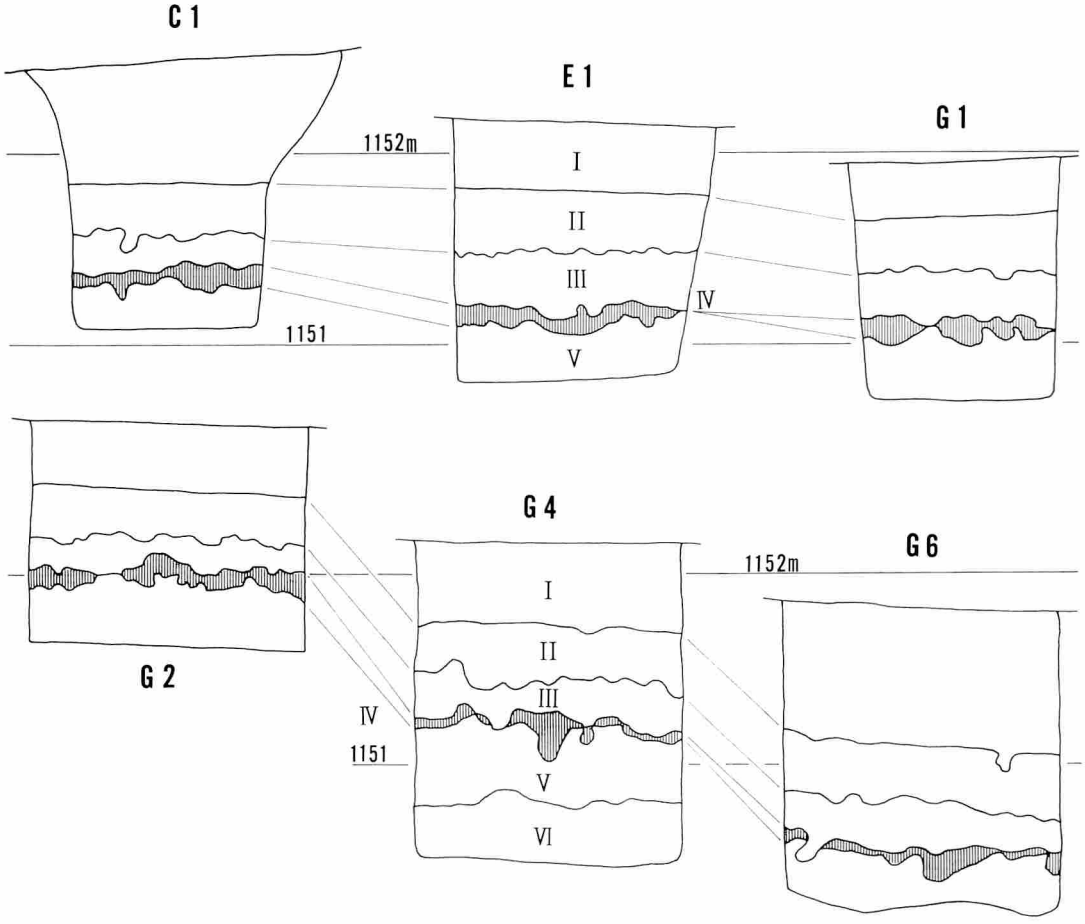
Ⅵ層はハードローム層である。やや赤みのある褐色を呈する。非常に硬く締まっている。Ｖ・Ⅵ層は上部ローム層（八ケ岳南麓団研グループ　1969）に含まれるものと思われるが、Ｐｍ－Ⅳの深さまで掘り下げることはできなかった。なお、地表面を観察すると高平坦地中央が南に向ってややくぼむが、西部に分布する風成堆積土によるもので、小河川などは存在しない。本来南に傾斜する乾燥した平坦地であったと思われる。

V　遺物の出土状況

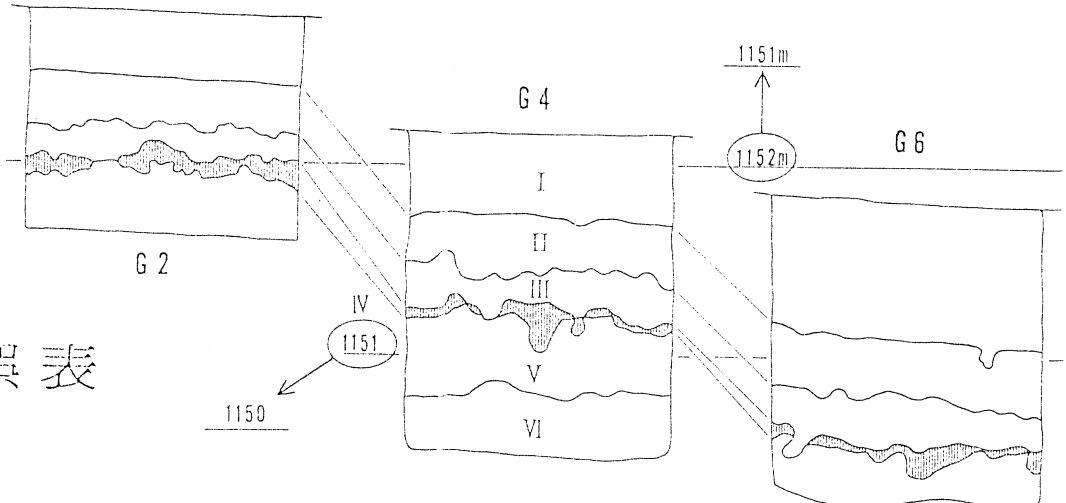
遺物はC３・D２・D４・E２・E３・E４・F３・F４・F５・F６区で発見された。各グリッドごとに分布状況を説明する。なお、各区の遺物出土状態図では、次の図を掲載した。**遺物出土状態図**（50分の１）。図中にグリッド境の杭の位置（正方形に黒点印）を示した。またセクション図の作成位置（丸に黒点印）を示した。**セクション図**および**遺物垂直分布図**（水平方向50分の１、垂直方向25分の１）。セクション図および北面、東面に投影した垂直分布図を重ねたものである。図中の数字は標高を示す。**調査終了状況図**（100分の１）。調査終了時の調査



第５図　土層写真（Ｇ４東壁）

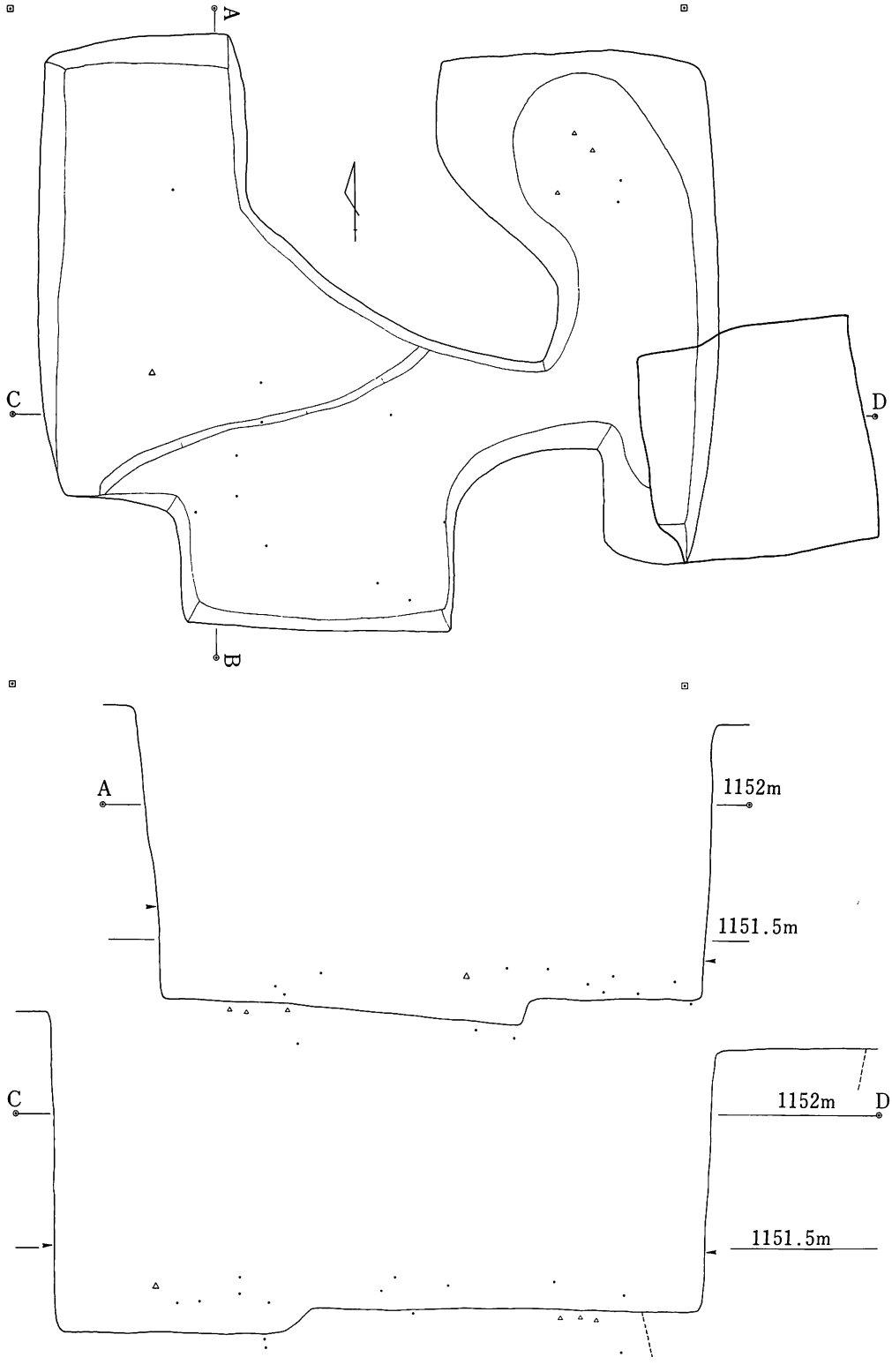


第６図土　層　図

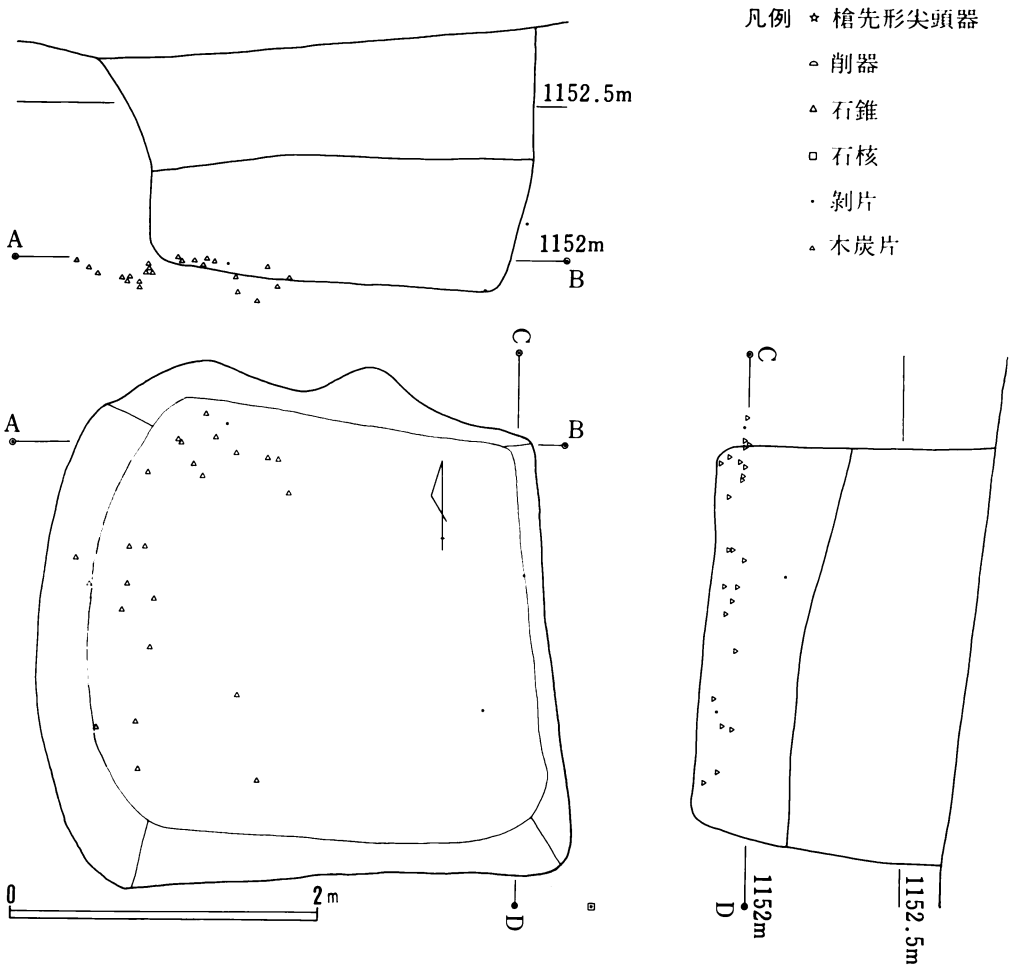


正誤表

5ページ　第6図



第７図　Ｃ３区遺物出土状態図（50分の1;　垂直分布図25分の1）

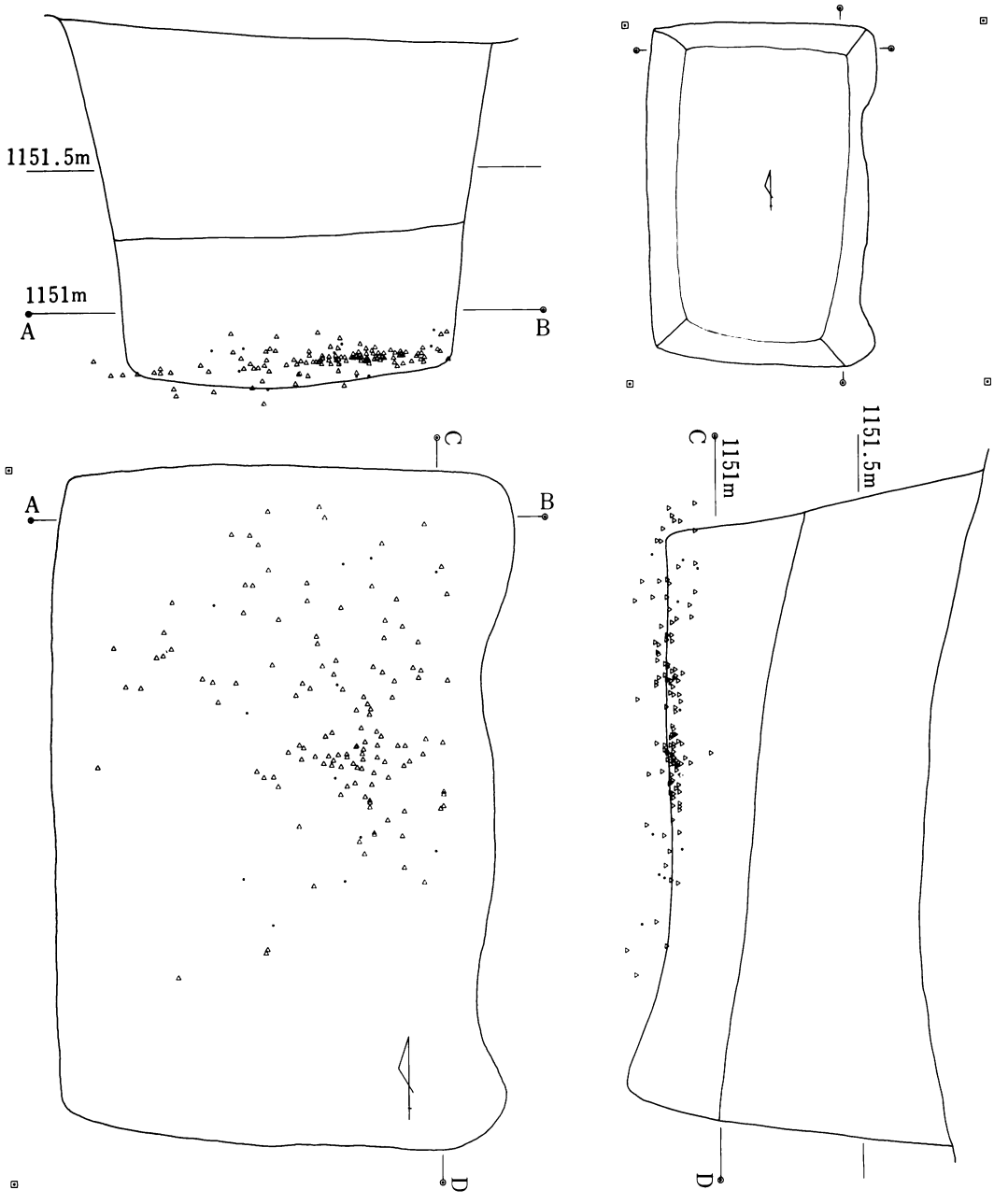


第８図　Ｄ２区遺物出土状態図（50分の1; 垂直分布図25分の1）

坑の平面図およびセクション図を示した。図中の記号の凡例は第８図中に示した。

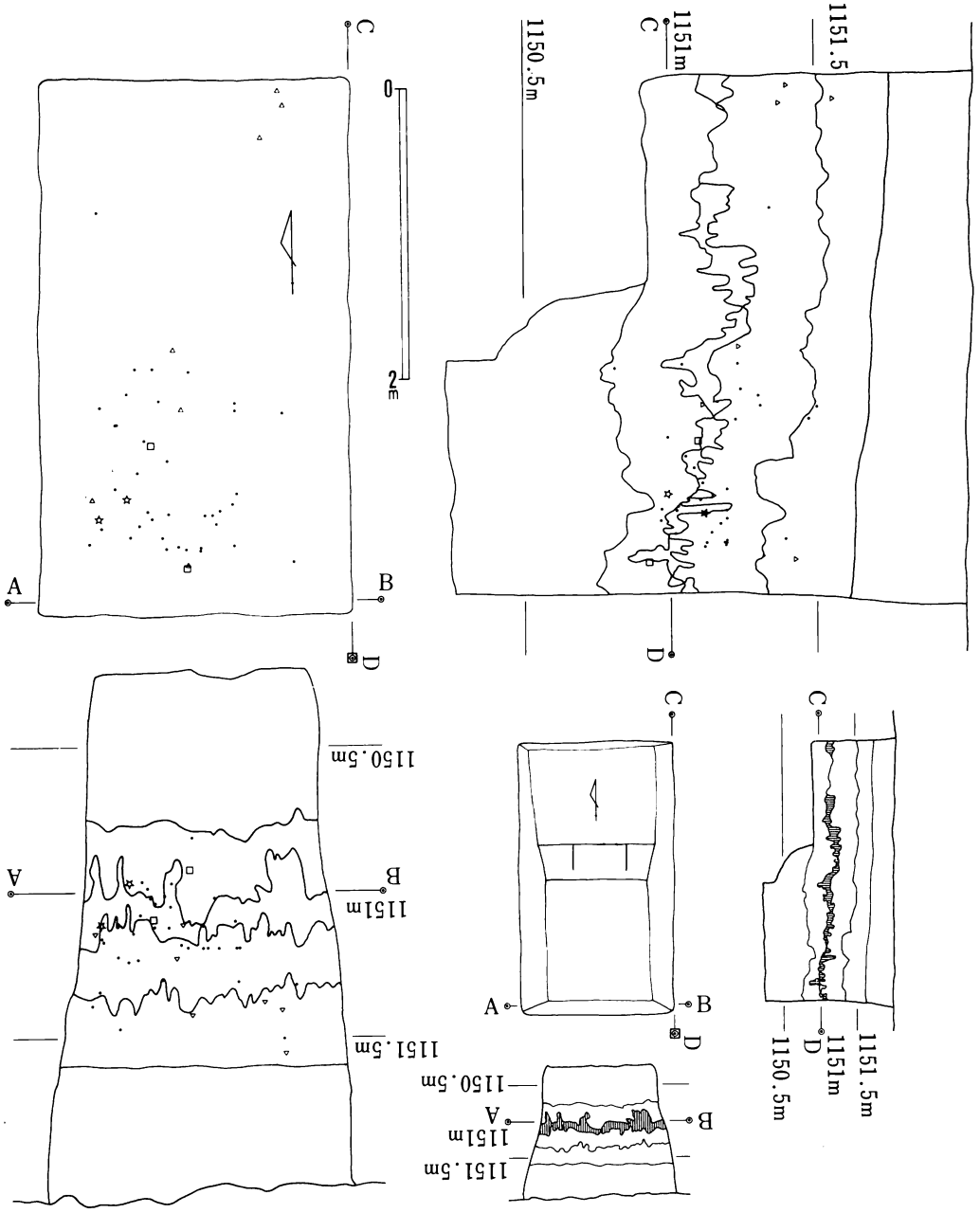
Ｃ３区　黒色土の一部を調査、Ⅳ層以下については調査に至らなかった。石器15点の他木炭片３点を取り上げた。定形的な石器は石錐１点。１ｇ以上の剥片は５点。黒曜石２点、シルト岩13点である。カラマツの立木のため全体を調査できなかった。北西部をより深く調査したが遺物は見当らず、より南側に遺物が多い。Ｃ４区付近にブロックが存在する可能性がある。なお、本区の南東隅に昭和58年度の分布調査の際の試掘坑がある。また、本区のみエレベーション図を示した。図中の矢印はＩ層下底面を示す。

Ｄ２区　南東部を調査した。石器３点、木炭片24点を取り上げた。定形的な石器はない。１ｇ以上の剥片もない。３点とも黒曜石である。Ⅳ層以下は調査に至らなかった。木炭片は黒色土下部に集中的にあり、調査区北西部に多い。Ｄ２区北西部付近に木炭片の集中部の存在が予想される。南東隅は最も多量の遺物を出したＥ３区と接しているが、ほとんど遺物が見い出されなかった。Ｅ３区を中心としたブロックの北西境界より外側にあるものと考えられる。なお、セクション図中央の線は、Ｉ層下底面を示す。



第９図　Ｄ４区遺物出土状態図（大50分の1;　小100分の1;　垂直分布図25分の1）

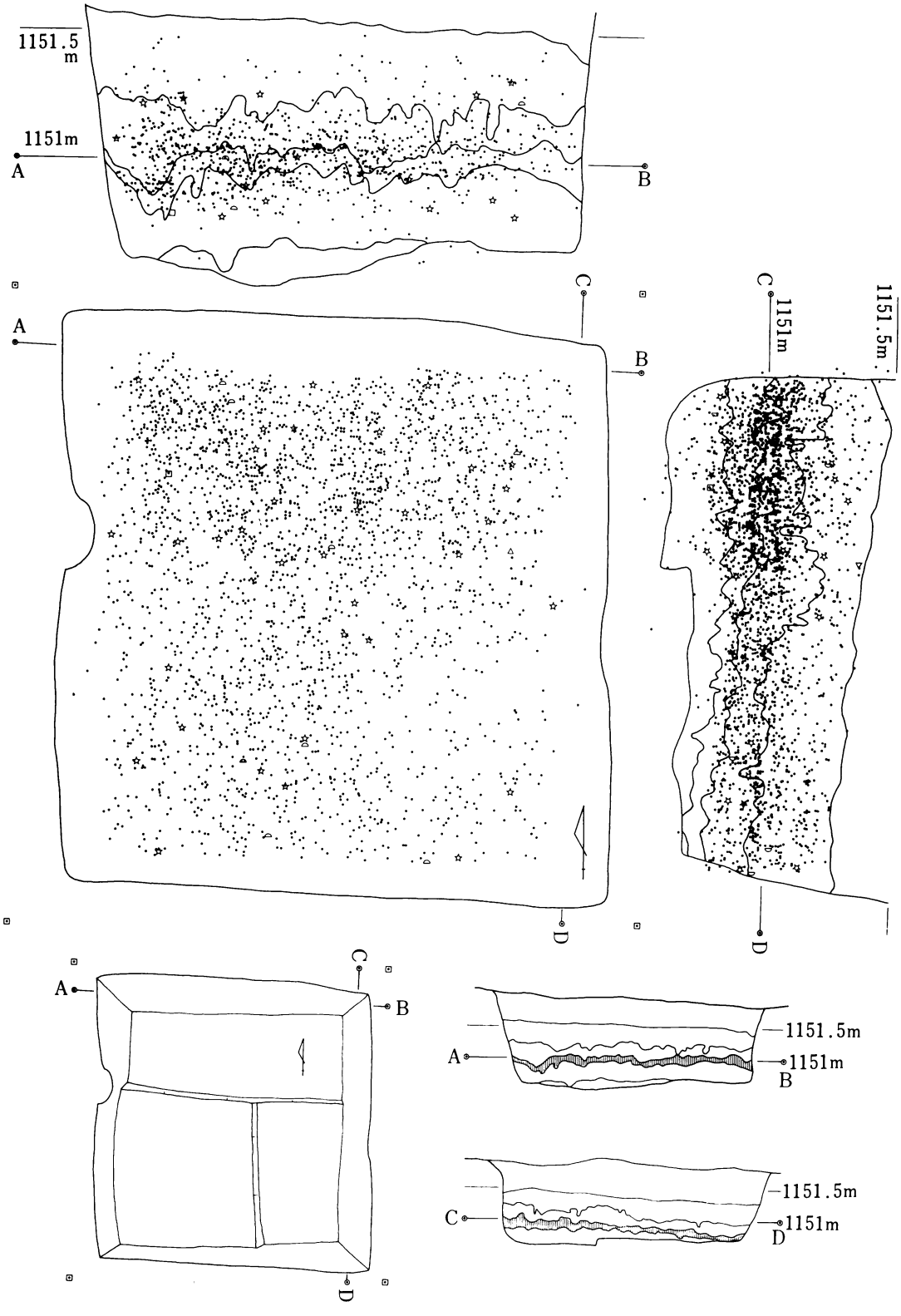
Ｄ４区　西半部を調査した。石器12点、木炭片 130点を取り上げた。定形的な石器はない。１ｇ以上の剥片は12点。黒曜石９点、シルト岩３点である。Ⅳ層以下は調査に至らなかった。北西部ではⅣ層上面までを調査した。木炭片は黒色土下部に集中的にある。おそらく、Ⅳ層中に至っても多量に出土するものと考える。東側中央に特に集中する部分があり、北側へ散漫に分布している。おそらく、Ｄ４区中央に木炭片の集中部が存在するものと思われる。剥片は木炭片集中部内や周辺に分布している。剥片は焼けた形跡がみられなかった。本区は最も遺物を多量に出土したＥ３区に接す



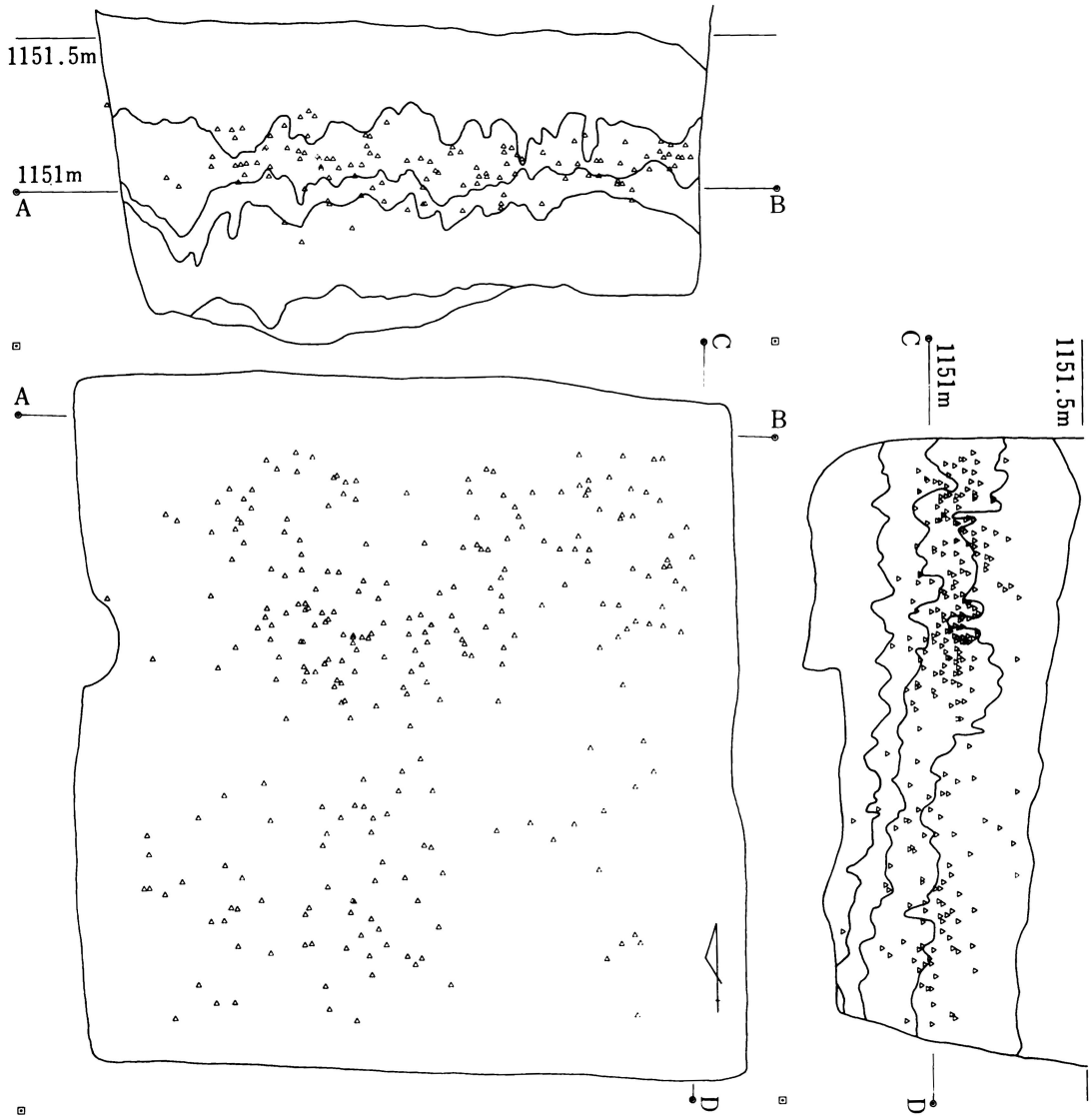
第10図　Ｅ２区遺物出土状態図（大50分の1;　小100分の1;　垂直分布図25分の1）

るが、その広がりの一部が存在する状況は窺えない。このブロックの南西部の外側にあるものと思われる。なお、セクション図中央の線は、Ｉ層底面を示す。

Ｅ２区　東半部を調査した。石器41点、木炭片７点を取り上げた。定形的な石器は槍先形尖頭器２点、石核２点である。１ｇ以上の剥片は15点。黒曜石25点、シルト岩16点である。Ｖ層下底まで調査を行い、南半部ではⅥ層を50㎝ほど掘り込んだ。しかし、Ｐｍ－Ⅳは確認できなかった。遺物はⅡ層下部からＶ層上部にかけて分布する。槍先形尖頭器と石核はⅣ層とＶ層に分布し、重量の重い



第11図　E 3 区石器類出土状態図（大50分の1；小100分の1；垂直分布図25分の1）



第12図　E 3 区木炭片出土状態図（50分の1；垂直分布図25分の1）

ものほど下位にある傾向がある。遺物は南半部に集中する。南へ行くにしたがって量が増大している。E 3区を中心とするブロックの北端部にあたると思われる。

E 3区　ほぼ全域を調査した。遺物量は最も多い。石器2526点、木炭片275片を取り上げた。定形的な石器は槍先形尖頭器34点、削器8点、石錐1点、石核1点の計44点である。1 g以上の剥片は461点。黒曜石は1685点、シルト岩は797点である。なお、本調査区に限り、排土の水洗選別作業を行った。Ⅲ層以下を対象とし、Ⅲ・Ⅳ層とⅤ層とを分けて作業を行った。その結果、Ⅲ・Ⅳ層の排土中から石器407.1 g 、木炭片76.4 g、Ⅴ層中から石器547.8 g、木炭片23.7 g が発見された。Ⅴ層は調査の期間の関係からやや粗い調査になってしまったため、かなり大型の石器も見逃している。E 3区の石器総重量は4478 gであり、そのうち3523.1 g 、79%を発掘作業中に取り上げることができたが、約2割は見逃してしまった。本調査区は調査期間中常に2名でジョレンがけ作業を

行っている。30日間延べ人数60名を投入している。こうした点からみればかなり高い精度の調査のはずである。今後、当核期の遺跡調査で注意しなければならないだろう。さて、遺物はⅡ層上面からⅤ層中部にかけて分布する。下位に行くにしたがい量が増すが、Ⅳ層からⅤ層上部にかけて極大となる。また、重量の重いものは下位に行くにしたがって多くなる傾向がある。Ⅴ層中で見逃がしが多い点を考え合わせ、Ⅳ層からⅤ層上部が中心分布域と考えたい。調査は北半部でⅥ層上面まで、南東部でⅤ層中部まで、南西部でⅣ層下面まで行った。石器は調査区全体に高密度で分布するが、やや北西部が多い。木炭片もやはり全体に分布するが、中央やや北西よりが高密度である。焼けた石器は確認されていない。なお、垂直分布図のうち北面のものは北から2m幅の遺物のみを投影している。

第13図　E 3 区発掘風景

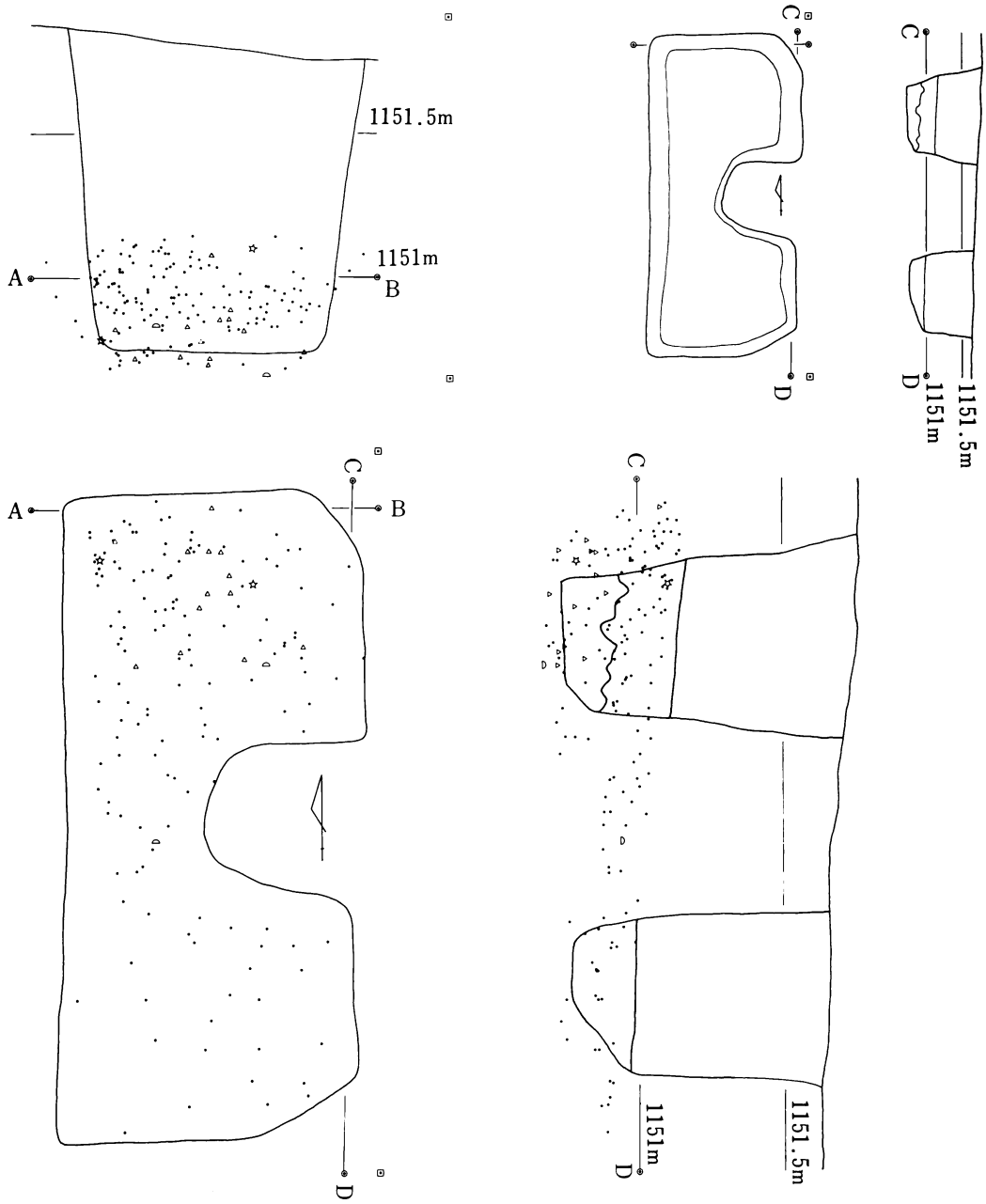
第14図 E3区北壁土層写真

E 4区　東半部を調査した。石器155点、木炭片13点を取り上げた。定形的な石器は槍先形尖頭器2点、削器2点である。1g以上の剥片は35点。黒曜石124点、シルト岩31点である。Ⅲ層下部まで調査を行い、Ⅳ層以下には至らなかった。遺物はⅡ層上面から分布し、調査範囲よりさらに下方へ続くものと思われる。特に北部に多く分布し、E 3区を中心とするブロックの南縁部にあたるものと思われる。

F 3区　北半部を調査した。石器26点、木炭片103点を取り上げた。定形的な石器は削器1点、使用痕ある剥片1点である。1g以上の剥片は6点。黒曜石17点、シルト岩9点である。西部でⅣ層上部、東部でⅢ層下面まで調査した。遺物はⅡ層中部から分布し、Ⅲ層中で特に多い。石器の分布は西側に行くほど多い。E 3区を中心とするブロックの東縁部にあたると思われる。木炭片は調査坑全体に分布している。

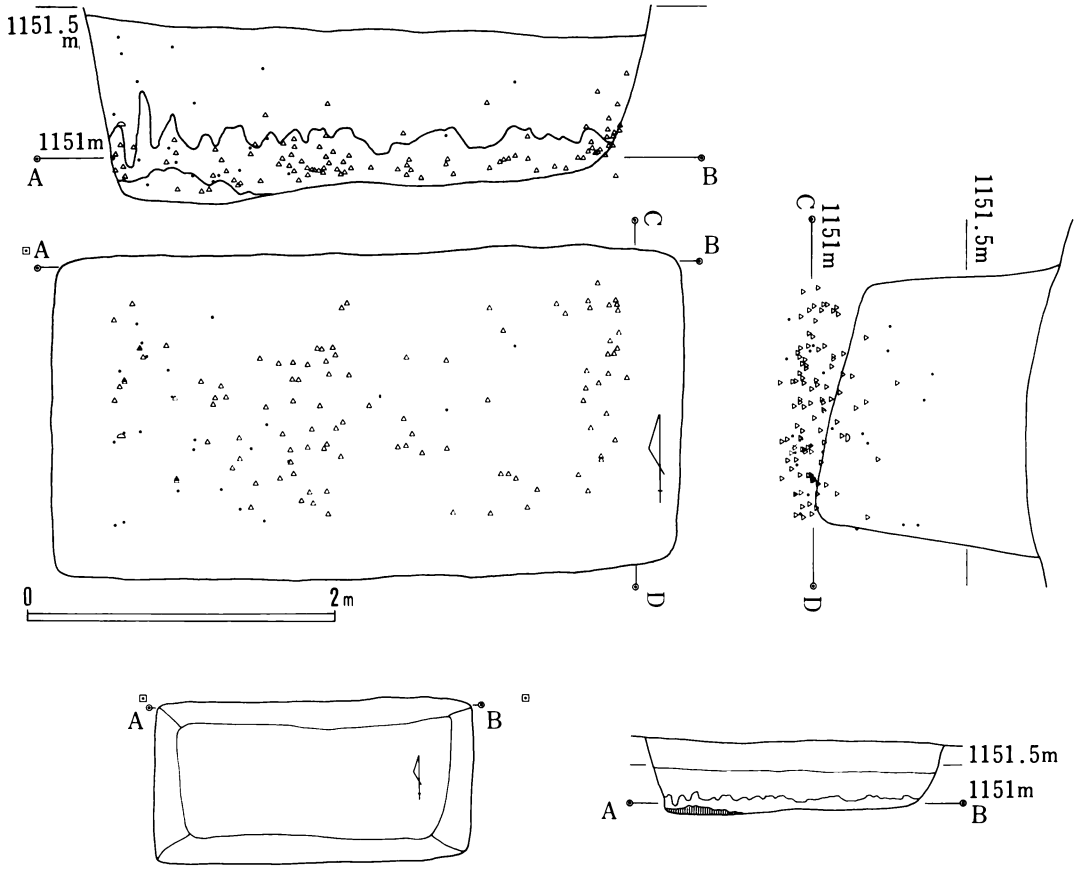
第15図 E3区ローム層中石器出土状態

上記の調査区の他、F 4区試掘坑から黒曜石の剥片6



第16図　E 4 区遺物出土状態図（大50分の1；小100分の1；垂直分布図25分の1）

点、F 5区試掘坑から黒曜石の剥片 2 点、F 6区試掘坑からシルト岩の剥片 1 点が出土した。いずれもⅢ層中出土である。



第17図　Ｆ３区遺物出土状態図（大50分の1;　小100分の1;　垂直分布図25分の1）

Ⅵ　遺跡の範囲

石器を中心とする遺物はＣ３・Ｄ２・Ｄ４・Ｅ２・Ｅ３・Ｅ４・Ｆ３・Ｆ４・Ｆ５・Ｆ６区で出土した。さらに昭和58年度の遺跡分布調査の際に、Ｂ３区の試掘坑からシルト岩の剥片５点、石錐１点、Ｃ５区の試掘抗から黒曜石の剥片１点、シルト岩の剥片１点、Ｄ３区の試掘坑から黒曜石の剥片１点、シルト岩の剥片２点が出土している。こうした状況から第４図でスクリーントーンの太線で示した範囲に遺跡があるものと推定した。遺跡の南西半部についてはＩ層の風成堆積土が厚く堆積しているため調査できなかった。また、遺跡内にはＥ３区を中心としたブロックが存在する。第４図中に破線で示した範囲である。この他Ｃ４区にもう１つのブロックが存在する可能性もある。南への広がりについては、Ｆ６区に行くにしたがい遺物量が少なくなるので南限に近いものと判断した。この範囲外の試掘坑では木炭片が若干出土することもあるが、石器は発見されない。したがって、直径30ｍ前後の広がりをもつ遺跡であろうと思われる。この範囲は、第２図の太線で示した14番ホールのコースに15ｍほど入り込んでいる。コース内はカラマツ林を伐採し重機で整地する計画であったが、県教育委員会と県企業局の協議の結果、この範囲は立木を残して保存することが決定され、実行された（第３図）。

Ⅶ 出土遺物

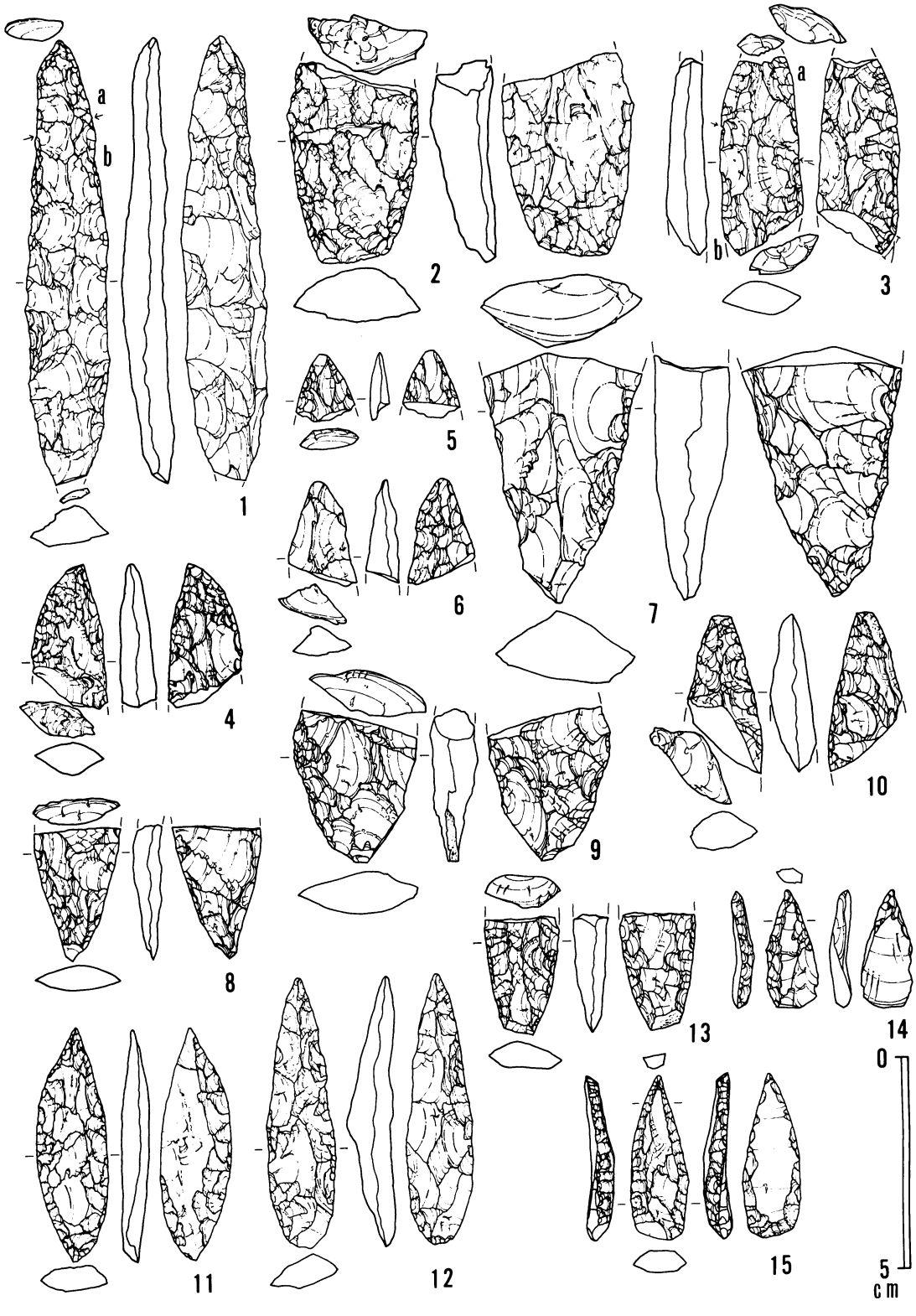
今回の調査で石器2791点を取り上げた。水洗選別の石器を加えれば3500 点ほどになるはずである。また木炭片も多量に得ることができた。木炭片は非常に残りが良く、またかなり大型のものもある。石器では大半が砕片であるが、大型の剥片や石器も多い。定形的な石器には、槍先形尖頭器38点、削器11点、石錐２点、石核３点がある。ここではこれらの石器について記述したい。

槍先形尖頭器（第18図、第19図１～６）　両縁部全体に平坦な剥離が連続的にみられ、片縁あるいは両縁部で両面に剥離があるものがみられる。両面とも素材の剥離面をほとんど残さないもの（第18図１～10・12・13）、片面のみ全面加工のもの（第18図11、第19図１・２）、両面とも素材の剥離面を大きく残すもの（第18図14・15、第19図３～６）がある。両面全面加工のものの中に大型のものが含まれる。第18図１は残存長 10.5㎝である。片面全面加工のもの、両面周辺加工のものは中・小型品ばかりである。第18図11は5.5㎝、12は6.4㎝、14は2.3㎝、15は3.9㎝である。木葉形のものが多いが、やや幅の狭いものが目立つ。第18図１は柳葉形であるが厚さがある。最大幅1.9㎝、最大厚1.0㎝である。第18図１・５・６・７・11がシルト岩、12が安山岩で、他は全て黒曜石である。なお、14・15はブランティングに似た加工であるがいずれも裏面に平担な剥離がある。また、第18図１・３は接合している。いずれも下半部のｂが、Ⅴ層ソフトローム中より出土し、約３ｍ離れたⅣ層中のａと接合している。また、第18図１ｂ・３ｂ・５・７・10・11・12、第19図５・６は、Ⅴ層ソフトローム中より出土した。なお、第18図５、第19図１・５・６は水洗選別によって得られた。第19図２はＥ２区、他はＥ３区出土。

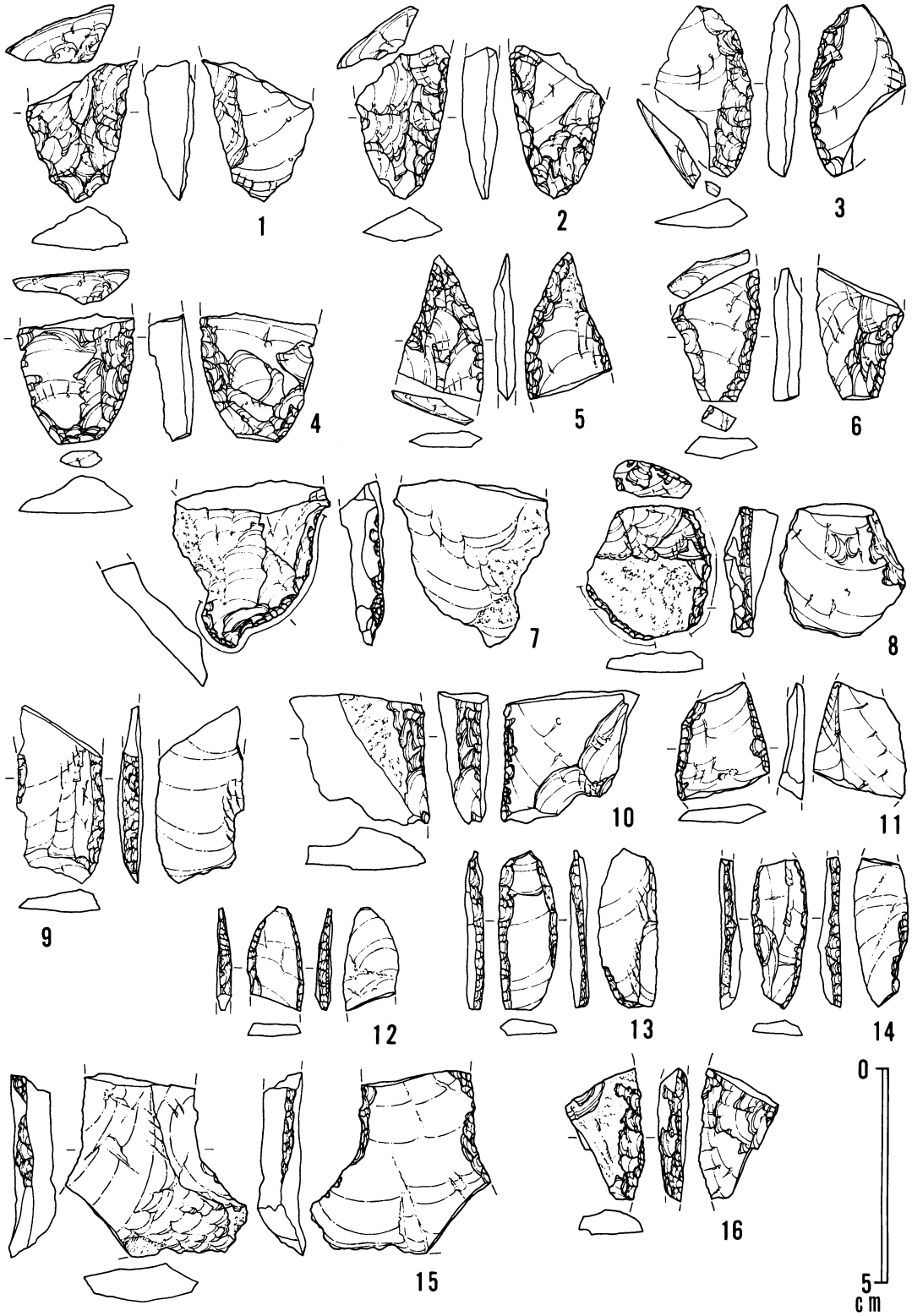
削器（第19図７～16、第21図１）　素材の片面の片縁ないしは両縁のほぼ全体に連続的な剥離がみられるものである。剥離は槍先形尖頭器にくらべ小規模である。刃部は凸刃のもの（第19図７・８・16、第21図１）、直刃のもの（第19図９～15）がある。15はやや凹刃に見えるが、欠損品で、素材の下半部には加工が弱いので直刃と考えた。12～14はブランティング様の加工であるが、ナイフ形石器のような先端・刃部がないこと、先端を尖らせた形跡がないことから削器とした。10の裏面刃部の剥離は使用痕である。第19図７・９・12～15、第21図１はシルト岩、他は黒曜石である。第19図10～12、第21図１がⅤ層中出土。第19図13はＥ４区、他はＥ３区出土。第19図10～12・14は水洗選別により得た。なお、第21図１は石錐と同じ加工がみられる。

石錐（第21図２・４・５）　非常に薄い剥片を用い、両縁部の一部に連続的な剥離がみられ、先端部に剥離が多くみられるものである。両縁部は直線的で、片面のみに剥離がみられるもの（第21図４）、両面に錯向的な剥離がみられるもの（第21図２・５）がある。いずれもシルト岩。２が昭和58年度試掘坑Ｂ３区出土のもの、４がＣ３区、５がＥ３区出土。いずれも黒色土中出土。なお、第21図３は使用痕ある剥片であるが、先端を深く抉る加工があり石錐かもしれない。Ｆ３区出土。また、本石器を尖頭石器と呼んでいた（保坂　1984）が、槍先形尖頭器とは明らかに違い、混同を避けるため石錐とした。

石核（第23図）　１はＥ３区Ⅴ層ソフトローム中出土品である。シルト岩。裏面中央に広く自然面がみられ、この面の剥離はいずれも急角度で正面の剥離群より古い。正面は全面を求心的で大規模な剥離でおおわれている。側面観より素材の大型円礫の３分の１程度の大きさと思われるが、分割

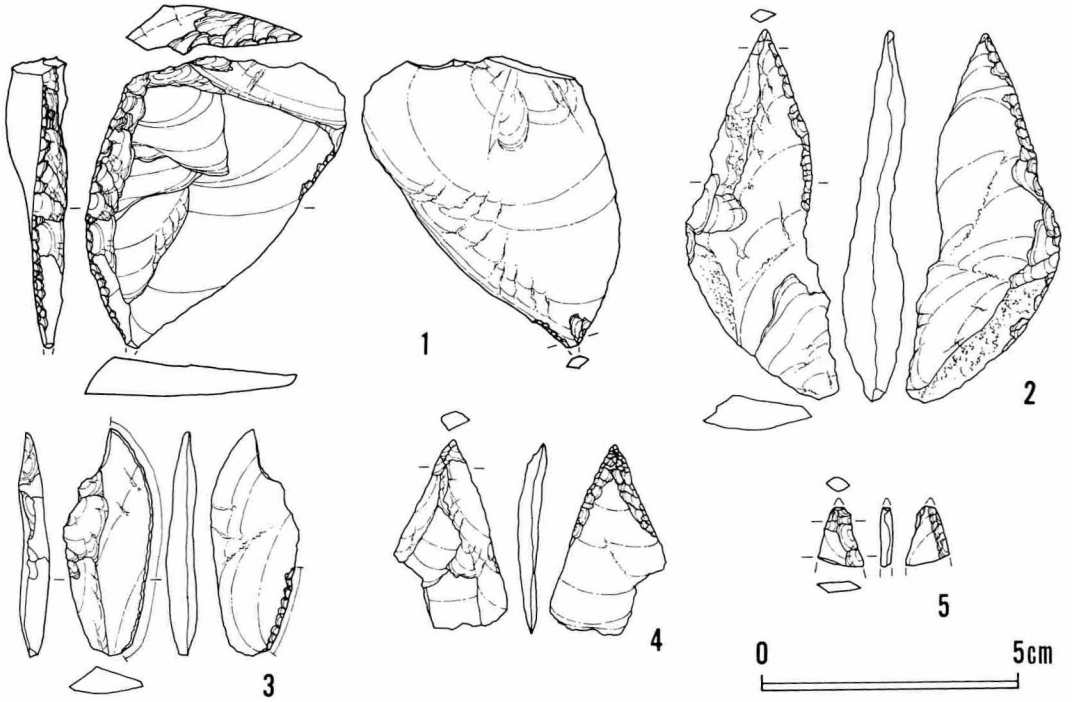


第18図　石　器　実　測　図　(1)

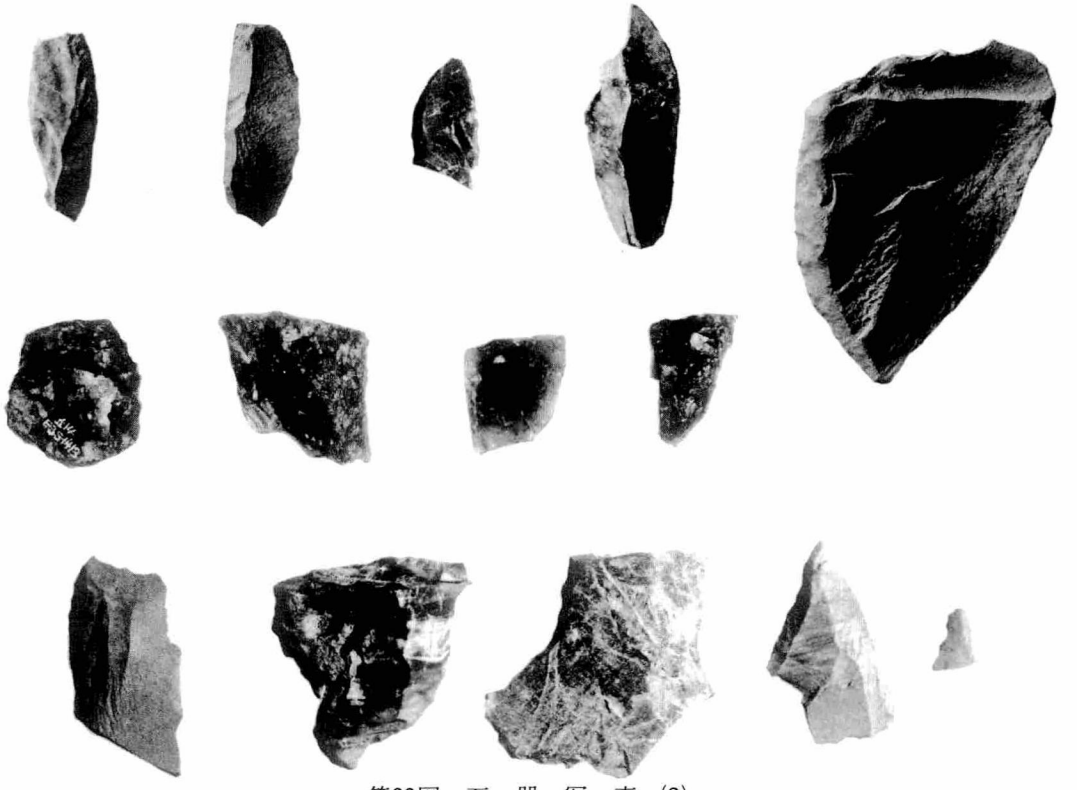


第19図　石　器　実　測　図　(2)

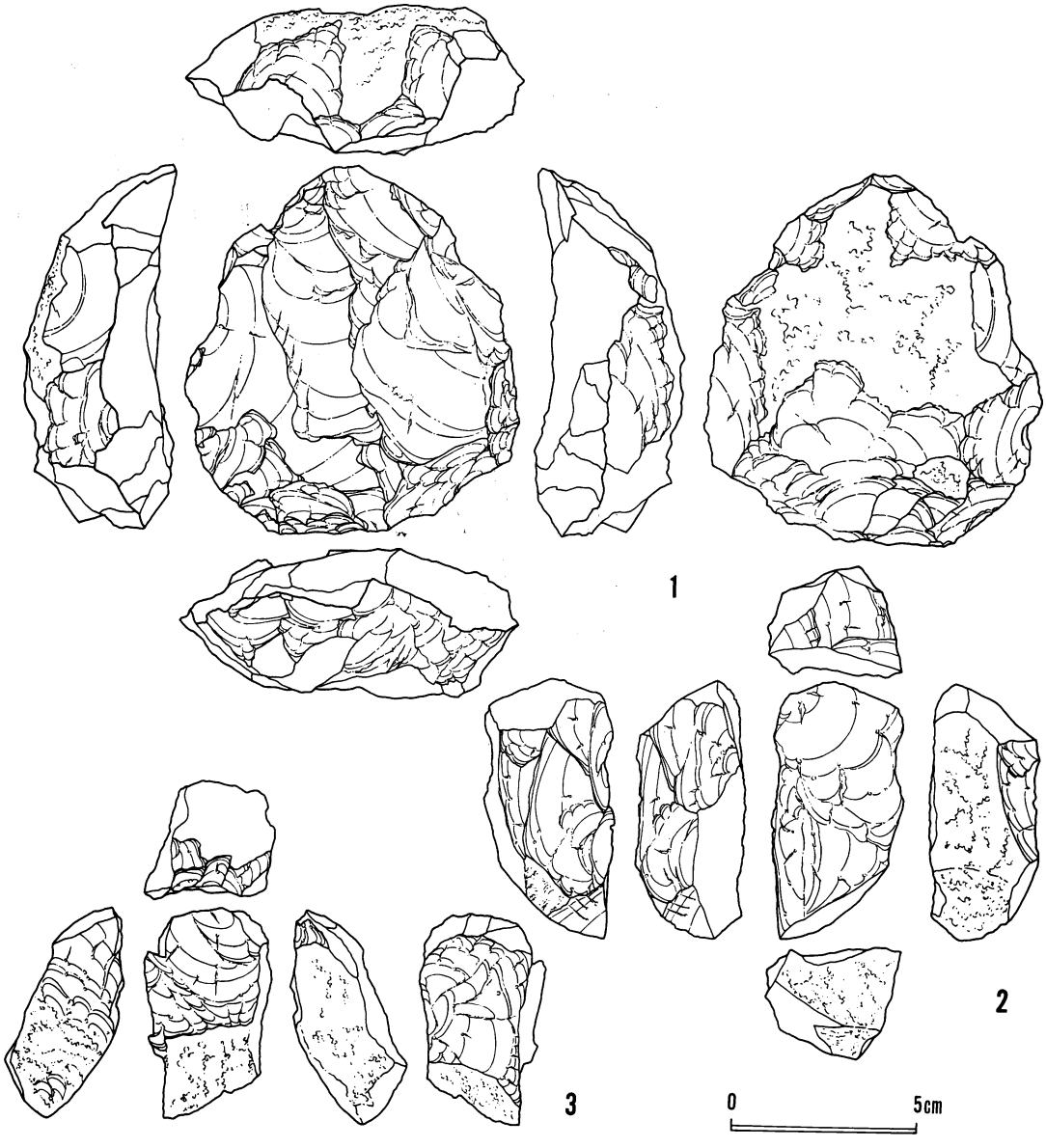
第20図　石　器　写　真　(1)



第21図　石　器　実　測　図　(3)



第22図　石　器　写　真　(2)



第23図　石　器　実　測　図　(4)

があったにせよ正面の剥離作業はかなり進んでいるものと思われる。こうした状況から裏面の剥離群を打面とした円盤形の石核と考えられる。第18図11と同一個体と思われ、槍先形尖頭器の素材を生産したことも考えられる。2・3はE 2区出土でいずれも黒曜石製、Ⅳ層中より出土。正面の剥離はいずれも周辺より新しい。打面や側面の比較的小規模な剥離で調整しながら、分割的な剥離をくりかえしたものと思われる。

さて、以上の他、若干の槍先形尖頭器の小欠損品があるが、主だったものはほとんど掲載した。また、黒曜石は夾雑物が非常に多く、冷山系のものと思われる。シルト岩は野辺山・川上の石器群に多用されているものと同じである。

Ⅷ　ま　と　め

今回の調査の結果、一部厚い風成堆積土にはばまれ不明の部分もあるが、直径30mほどの広がりをもつ、槍先形尖頭器を主体とする石器群の遺跡であることが確認できた。遺跡はゴルフコースに一部かかるが、県企業局の英断により現地保存された。遺跡と開発とのありうべき姿と高く評価されると確信する。遺跡の内容であるが、大型のブロック1カ所を確認したが、さらに1カ所以上のブロックがあるだろう。石器は黒色土上部（Ⅱ層漆黒色土層）から下層に行くにしたがい量を増し、Ⅳ層漸移層からⅤ層ソフトローム層上部で極大を示す。また、大型品は下位ほど多い。石器組成もいずれの層でも大差ないものと思われる。こうした状況からして、いずれも1つの時期のものと考えられる。ただし生活面の位置は、傾斜地に立地することや時間に追われソフトローム層の調査が十分にできなかったことから数量的に確定できず、漸移層からソフトローム上部の約30cmの間にあるとしか限定できない。石器群の時期については地質学側からも行う予定でいるが、13000年前の年代が与えられている"デカパミ"は存在しない可能性が強いとのご教示を熊井久雄氏より得た。今後、石器群の対比を行ってゆく予定でいるが、おそらく先土器時代最末期に位置づけられよう。遺跡の立地環境については、乾燥した高平坦地の肩部付近に低地を臨んで立地する。低地は、小湧水があるものの野辺山原のように湿地状ではない。また、現在100mほど下にある川俣川は、当時この低地と同レベルであったことが推定できた。花粉分析も試みた結果、胞子が90%を占め、樹木花粉ではツガ属、コナラ亜属等がみられるものの、かなり陶汰されているらしい。これらは、別の機会に発表したい。

引用・参考文献

磯貝正義・飯田文弥　1973『山梨県の歴史』　山川出版社
佐藤八郎・佐藤森三校訂　1970『甲斐国志』第二巻　雄山閣
貝塚爽平　1977『日本の地形』　岩波書店
八ケ岳南麓団研グループ 1969「八ケ岳南東麓の第四系」（地学団体研究会専報第15号『日本の第四系』所収）
八千穂村池の平遺跡発掘調査団　1984『池の平遺跡』
明治大学考古学研究室編　1980『報告・野辺山シンポジウム1979』
同編　1981『報告・野辺山シンポジウム1980』
同編　1982『報告・野辺山シンポジウム1981』
保坂康夫　1985「山梨県の先土器時代遺跡」（『歴史手帖』13巻1号所収）

昭和60年３月25日印刷
昭和60年３月30日発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第８集

山梨県北巨摩郡高根町
丘の公園14番ホール遺跡
範囲確認調査報告書

発行所　山梨県教育委員会
山梨県企業局
印刷所　株式会社　少國民社